

産総研デザインスクール

未来社会を創造する共創リーダーへの招待

▶ 未来社会をデザインし、多様な人と組織を巻き込み、強い意志を持って未来社会の実現を目指す人材を育成しています。

なぜデザインスクールを始めたのか

- 「厄介な問題」に対し科学技術だけのアプローチに限界。「誰が」「どのように」解決を行えばよいのだろうか？
- 復興という「厄介な問題」に10年携わり、企業・自治体・NPO/NGO・市民と「ここに生きるとは」を共に考え、孤独死対策から再生可能エネルギー小売電気事業会社設立まで協働しました。
- 10年間で得た共創の実践を知識化し、志を共にする方々と「共創リーダー」を育成する学校を創りました。
- HARC共創場デザイン研究チームの研究成果を元にカリキュラムを開発しました。



宮城県気仙沼市で実践した復興支援プロジェクト 10年の経験。

なにを学ぶのか

- 社会問題の本質を洞察する方法
- 社会と対話しながら素早く社会実装する方法
- 他者を巻き込む共創リーダーシップ
- ネガティブケイパビリティ（答えの出ない事態に耐える態度）



テーマ	回数	到達目標
・Will開発 ・Creative Leadership	10	・自身の価値観を言語化でき他者に説明できる。エスノグラフィを理解し、実践できる状態。 ・自身の強みを言語化し他者に説明できる。強みをチームへの貢献行動に自身で紐付け言語化し他者に説明できる状態。 ・志を宣言文として言語化できる状態。 ・Creative Leaderとしての行動宣言を言語化できる状態。 ・未来洞察の手法を理解し実践できる状態。
・未来の兆しを洞察しWillを揺さぶる ・フィールドを観察・対話する ・課題を定義する	9	・相互主観性を理解し、チームでの志を言語化できる状態。 ・問いを生成、提供、回収、新たな問いを生成するサイクルを行える状態。 ・AS-IS TO-BE分析、KA法により、現場（1次情報）を整理・分析、ギャップ分析により問題を定義できる状態。
・課題を解決するMVPを何度も創る・試す ・他者を巻き込む ・プロジェクトをブーストする	5	・ラピッドプロトタイピングとフィードバックのサイクルを行える状態。
・MVPをブラッシュアップする ・他者に語り参加してもらう	5 4	・エフェクチュエーション（手持ちの材料を組み合わせる価値を高める）行動をチームで創出することができる状態。 ・ビジネスモデルキャンバスを用いたビジネスモデル設計、アナリシス、検証をすることができる状態。 ・問題を自分事として語り（ナラティブ化）、他者においても自分事とすることができるプレゼンを行える状態。

2024年度カリキュラムの概要（全33回）。主に研究者、技術者を対象としているが、価値観の多様性を担保するために、自治体、大学、NPO等からの応募も積極的に受け入れています。受講料120万円/人、毎週金曜日 10:00-17:00で実施しています。

産総研デザインスクール

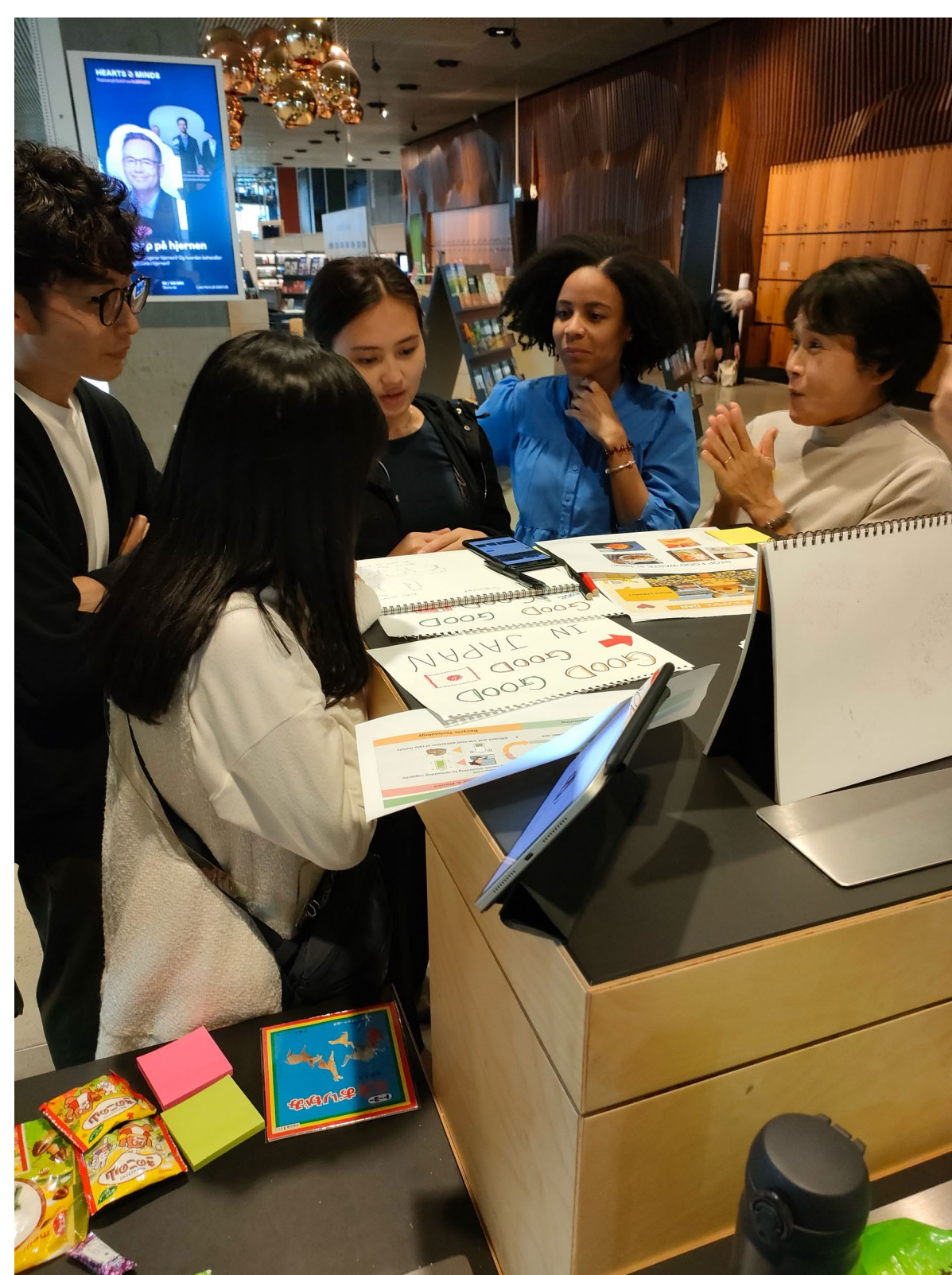
未来社会を創造する共創リーダーへの招待

どのように学ぶのか

■ 経験 → 内省 → 知識化 → 実践を繰り返す
「経験学習」により、受講者は主体的に学びます。

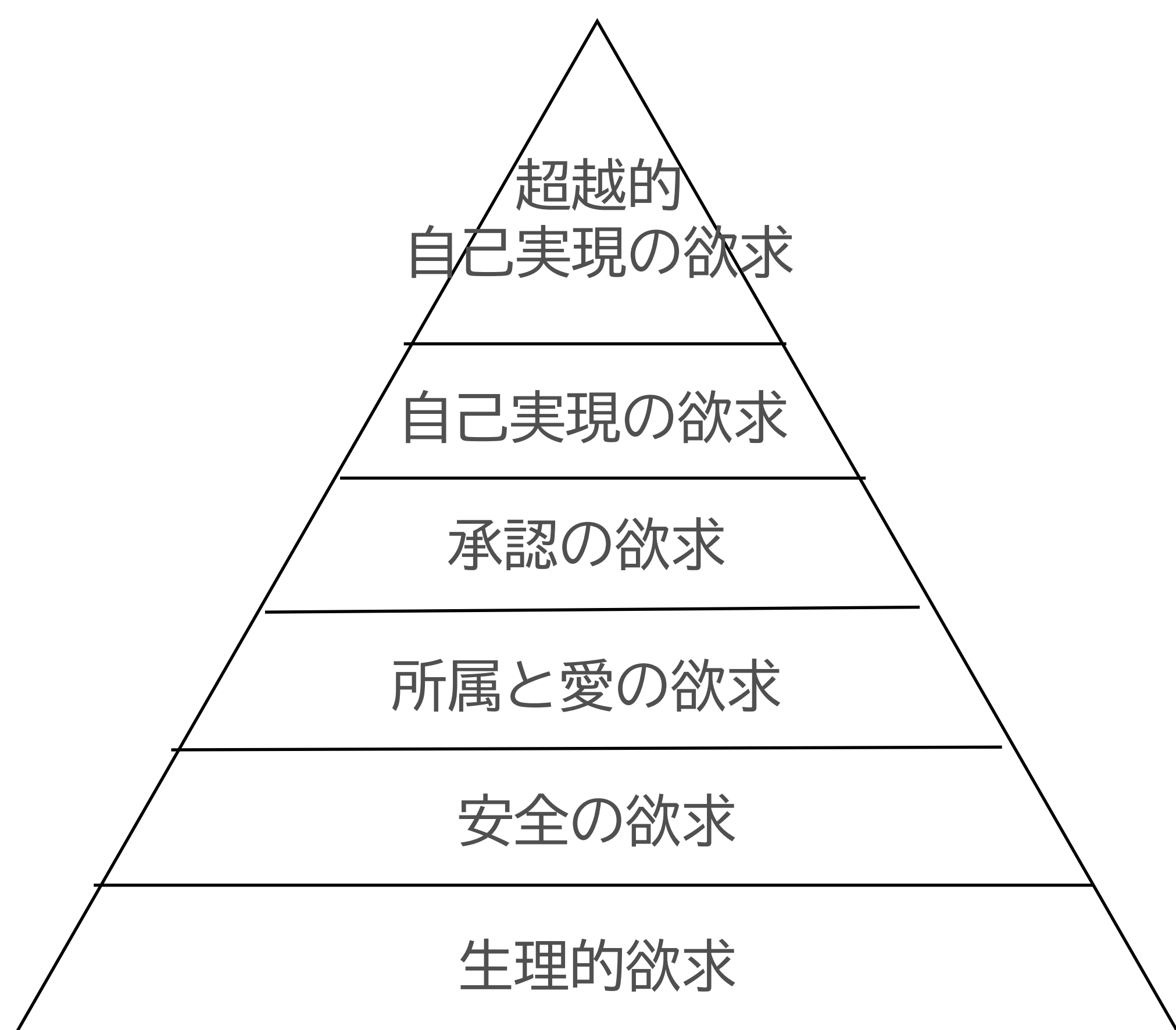
■ 一見遊んでいるような演習と実践から、失敗を躊躇せずチームで学び合います。

■ 遊び心（プレイフル）と挑戦（チャレンジ）を大切にしています。



欧州視察演習でのデザインリサーチとラピッド・プロトタイピングの様子。

意志行動の重要性



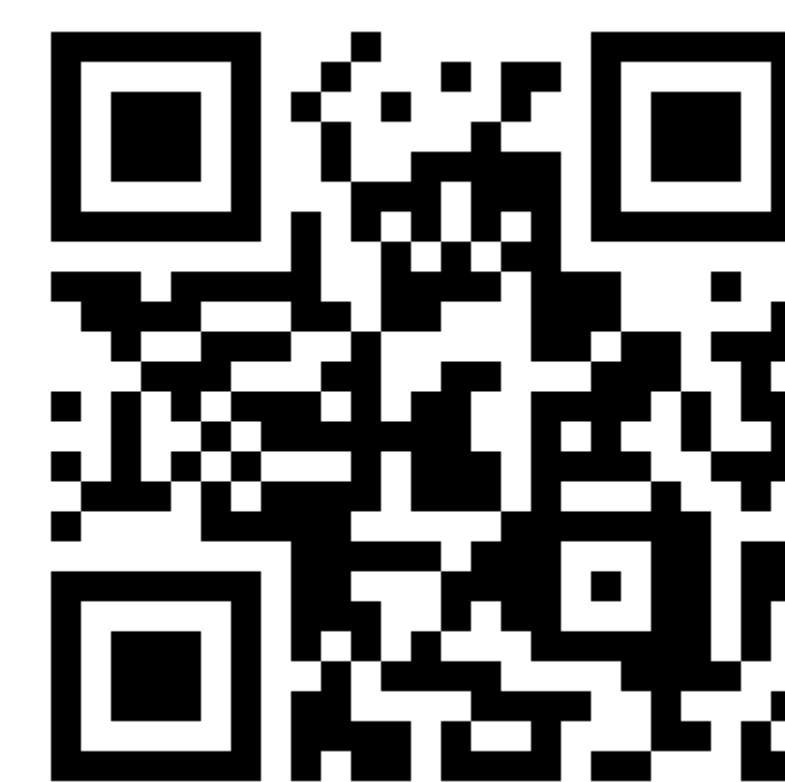
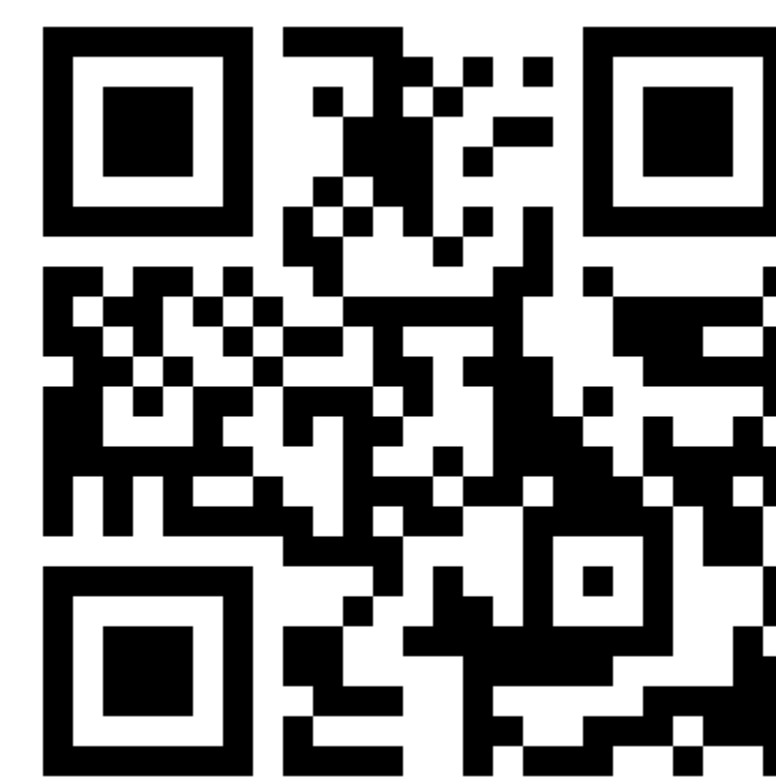
マズローの基本的欲求の階層

- 問い：あなたは何者で、何を成し遂げたいのか？
- 研究者・技術開発者は自身の関心事（インナーニーズ）へのこだわりが強い
- 一方で、多くの企業人は言語化に違和感、拒否感、不安を感じる。
- 偽りなく自分として成し遂げたいと思う社会貢献に繋がること（マズローの超越的自己実現）への思いはプロジェクトの強い駆動力になる。
- Willとは、名詞としてのWill（意志）と助動詞としてのWill（「〇〇をする」という行動意志）の2つを意味している。
- スクールでは「Willの開発」を行っています。

卒業生の声

2018年から産総研内外90名が卒業しています。

- 説得できなかった上司が納得してくれました。自分の気持ちをストレートに伝えられるようになった。
- 卒業後、元々別グループだった研究員と共創的研究活動ができるよう運営している。特にデザイナーとの協働は、自分たちの素材が実用化出来る実感が持て、私もメンバーも改めてワクワクできた。



卒業生の声をYouTubeで視聴できます。